

冬の章

一

「あなたは……」

息を呑む雫の前に、童は静静と歩み出てくる。精神が七つか八つといったところの幼い姿で、藍染めの清潔な着物を着ていた。

しかしその顔は歳に似合わぬ清冽な印象で、世を捨てたかの如き寂しさすらも感じさせる。青白く血の気のない肌が、男か女かの別を越えた幻のような雰囲気を漂わせていた。

更に驚いたことには——童は腕に、小振りな鷹を載せている。

「殺すな」

童は、囁くように幽く、そう云った。颯太が虚勢を張ってこう問う。

「お前は何者だ。もしやこれを操っていたのではあるまいな。私たちは危うく殺されるところだったのだぞ。それを一方的に殺すななどと身勝手なことを——」

そんな明らかに無理をして饒舌に振る舞っている颯太に対して、童はその冴えきった眼差しを向けた。すると、あっさりと颯太は沈黙した。

相方の情けなさに溜息を吐きながらも、雫は膝を折って眼の高さを童と同じにすると、微笑みを浮かべて尋ねた。

「お話してもいいかな？ 私の名前は御剣雫。あなたのお名前は？」

「——岬。鳥使いの、岬」

「岬……くん、だね？ ここで何をしているのかな」

「鳥使い」

「あの鴉も？」

「そう」

「あの鴉は……妖怪では、ないの？」

「違う」

拗ねたように雫と視線を合わせてくれず、しかも返事は短簡に過ぎて訳が判らぬ。困ってしまったって、雫は頬をぼりぼりと搔いた。

すると岬は、小さく付け加えた。

「彼は妖怪から、此処を護るための者」

「ここを？　じゃあ、襲いかかってきたのは……」

「此処に入ってきた。だから、追い払おうとした」

「そうするとこの鴉は——護神様」

少少蒼い顔をして桜が云う。鴉が元凶なのではないかと云いだしたのは桜なのだから、責任を感じているのだろう。

追い打ちを掛けるように、先程から社を調べていた颯太が戻ってくる。

「此処の社はどうやら鴉を祀っているようだ——うん、その、なんだ、もしかすると拙いことをしてしまったやも、知れんな」

誤魔化し誤魔化し颯太が告げると、真っ青になった桜が、雫に向かって勢いよく頭を下げた。

「も、申し訳ありませんでしたッ。私の軽率な物云いでこのようなことになってしまい、御剣様にとんでもないことをさせてしまつて——この桜、如何様にでも責めを負う覚悟に御座います。どうか御剣様、ひと思いにッ」

「ちよちよつとちよつと桜ちゃん、そんな、大袈裟な」
慌てて雫は桜に頭を上げさせる。しかし桜は目に一杯涙を浮かべ、すっかり思い詰めていた。

「いいえ大袈裟などでは御座いません。畏れ多くもお社に祀らるる護神様の頭に木刀一閃あるう事か気絶させるなど、万死に値する大罪。咎を負うのは私だけで充分に御座います」

どうか、どうかッ、と云つて仕舞いに桜は地べたに這い蹲うと、頭を砂に擦りつけた。手のつけようがなく、雫は困惑する。

（そういうもんのかな、私、マズいことしちゃったのかな……）

雫も次第に不安になってきた。神様を全力で殴りつけ昏倒させた場合どういう罪に問われるのかは、寡聞にして聞いたことがなかった。

ところが。

そんな伏せたままの桜の姿を見て、岬はすたすたと側まで近寄ると——。

徐ろに草鞋を履いた足で、桜の頭をぎゅつと踏みつけた。

「え、ちよつと岬くん!？」

激しく動揺する雫を尻目に、岬はそのまま、ぐりぐりと足を動かす。美童子に踏みにじられている桜の方は、微動だにしない。端から見て、甚だ

異様な光景である。颯太も啞然としたまま、何も云わなかった。朝日の射し込む中、淡淡とした時間が流れる。

このままどうなってしまうのだろうかとうと雫は心配することしきりだったが、すぐに岬は足を退けると、ぽつりと云った。

「これでよい」

「有り難き、有り難き幸せに御座いますッ」

随喜の涙を流さんばかりの勢いで頭を下げたまま桜は云う。雫はその言葉も振舞も最早違う意味にしか取れず、何だかひどくげんなりした。

何とか気を取り直すと、雫は岬に尋ねる。

「念のために訊きたいんだけど。岬くんは……妖怪あまかしなの？」

「違う」

「じゃあ神様なの？」

「違う」

「それなら、何？ 普通の人間？」

「鳥使い」

判るような判らないような話であった。

「鳥使いつて事は、あの鴉やこの鷹だけじゃなくて、他の鳥も操れるの？」

こくり、と岬は頷いた。そして、空いている右手を差し上げると、人差し指をくいくい、と小さく動かす。

すると、途端に辺りの木木の枝葉が揺れ、ちゅんちゅんと長閑のどかな鳴き声を上げて、何十羽もの雀が、二人の元へ慌ただしげに飛んできた。

「え、え、え、ちよつと!?!」

たちまち雫の肩や腕、頭に雀たちが留まった。羽が肌に擦れてくすぐつたい。この平穏な鳴き声を聞くと、こんな状況でも早朝らしい好い心地になってくる。

身をよじらせて笑いながら、雫は岬に云った。

「凄いな、岬くん」

そうして雫は岬の頭を撫でた。褒められて一瞬きよんとした岬は、再び軽く人差し指を伸ばして、雀たちを一斉に町へ飛び立たせる。鳥たちは朝を告げに、陽ひへ向けて羽ばたいていった。

それを見送ると、雫は改めて、岬に向けて云う。

「あの、私が気絶させちゃった大鴉、大丈夫かな」
すると岬は、パンパンと手を叩いた。
鴉は、目蓋をすつと開く。

「ぎゃあ」

一声鳴くと身を起こし、空へ向けて、その大きな羽を動かす。
忽ち高く飛び上がると――。

元の通り、鳥居の上へと、ゆっくりと舞い降りた。

朝日を浴びた墨黒の鳥は、知性を感じさせるその輝く瞳を雫たちに向け、
静かに佇んでいる。

澄み切った姿は、どこまでも美しかった。

「……本当に、御免なさい」

雫は頭を下げた。

合わせて颯太も、桜も首を垂れる。

そうして、雫が顔を上げたとき――。

既に鳥居の上には、何もいなかった。

「帰った」

岬は、そっと云った。

二

それから雫たちは、岬をつれて宿に戻ることにした。まだこの子に訊きたいことが山ほどあったのである。

一緒に来てくれるかな、と云ったときには駄目で元元と雫も思っていたが、存外素直に岬は頷いてくれた。何となく、この子は此処を離れてはならないのではないか、と思っていたため、雫は小首を傾げた。

「いいの？」

「うん」

岬は首肯し、右手で雫の左手を握る。小さく、冷たい手だった。

しかし、雫が発発しようとする、

「その前に」

岬はそう云って、境内の隅にあるこぢんまりとした社の方へと、雫の手

を引いた。

引かれるままに雫は歩いていき、岬と共にその社の前へ立つ。すっかり辺りは、樹の合間から射し込む朝の光で明るくなっており、社も沈黙したまま、その古ぼけた姿を晒していた。岬は社の観音開きを、そつと開く。

雫が覗き込むと、その中には――。

鞘に収められた一振りの、見事な刀が収められていた。

「これを……私に？」

雫が問うと、岬はうん、と頷いた。

雫が引き出すと、刀にはずしりと重みがある。紛う事なき真剣である。試しに抜いてみれば、ぞつとするほど清麗な刀身が現れる。間違いなく、触れるだけで身を断つ名刀である。

雫は思わず、躊躇った。

――本当にこんなものが、必要なのか。

「斬れる物を斬らず、斬れぬ物を斬るが誠の刀なり」

その時前置きなく、岬がぼつりとそう云った。

驚いて雫が岬を見ると、岬は社の扉の裏を指さした。

「書いてある」

見てみると確かにそこには、そんな達筆の言葉が、掠れた文字で残されていた。誰の筆によるものかは知れない。刀を手に捧げ持ったまま、雫は思わずその場で考え込む。

言葉の意味が判らなかつたから――ではなかつた。

判りすぎるほどに判るからこそ、それが自分に出来るかどうか、そのことだけを一心に、考え込んでいた。

そして最後に、覚悟を決めた。

――出来るか否かは問題ではない。

――せねばならぬのだ。

雫は重い刀を、しっかりと腰に差した。

鞘には叢雲、とだけ書かれていた。

こうして岬も加えた四人は、朝焼を眺めながら、まだ人っ子一人おらず静かな江戸の町を、歩いて宿まで帰った。

妙に桜に元気がないのが、雫は気に掛かった。ずっと俯いたまま、黙りこくっている。まだ鴉の一件で落ち込んでいるのだろうか、責任を感じているのだろうか、と雫は声を掛けたが、桜は違います、とだけ小声で応えた。何か思うところがあるらしかった。

元気がないと云えば、颯太もだった。否——正確に云えば、こちらは単に、不機嫌なだけである。一人腕を組み、岬の手を引く雫を、じろじろと眺めている。

「雫、そんな得体の知れない奴と手を繋いで歩くというのはどうかと思うぞ」

「なんで？ 可愛いでしょう」

「石のように無口な子供のどこがいいんだ。能面の方がまだ愛想があるくらいだぞ。愛でるならもつと反応が目に見える生き物にしろ」

「要らないつまらないことばかりごちゃごちゃ言って他人困らせてるどこの誰かより、よっぽどいい」

「そんな最低最下の小喧しくて鬱陶しい人間と比較するのはおかしいだろう。誰だそれは。私が成敗してやる」

「是非そうしてください」

冷たく雫は云い放つ。一方、口を尖らせた颯太は物欲しそうに、雫の残る右手をちらちらと見ていた。

すると不意に、岬の左腕に載っていた鷹が飛び立った。

ばさばさと飛ぶ鷹は、真っ直ぐそのまま颯太の処へ至ると、いきなり鋭い嘴でその頭や腕をつつき廻し始めた。

「痛い痛い痛いッ、なにするんだッ」

わあわあ云いながら逃げ惑う颯太にびったりくっついて、鷹は何時まで経っても攻撃をやめない。岬はツンとすましたまま、何も云わない。

雫は二人の間で、ただ声を上げて笑った。

「……以上のような具合でございました」

雫は浄瑠璃姫の前に膝をつくとき、そう報告を終えた。いつも通り、姫の松の間には颯太、桜、巴、それに加えて今は、雫の隣に岬が座っている。

鷹は、外の屋根の上に放してきていた。

「ふむ。ご苦勞であった。兎に角その鴉は、妖怪とは関わりなかったわけじゃな。それはよいが——ならば我が家臣を殺めたのも、鴉ではないということになる」

また何故宿の屋根の上に幾羽も鴉を差し向けたのじゃ、と姫は続けて岬に問うた。しかし岬は、畳の目を弄るのに忙しいらしく、聞いているようには見えない。姫はむっとして云った。

「どうなのじゃ。悪気はなかったにせよ、そなたの眷族がそのようなことをしていたのならば、何か一言あつてもよいのではないか」

だが岬は、部屋の隅に置かれた魔除けの雛人形に興味を示している。慌てて岬を抱き寄せると、雫は必死で取り繕った。

「シャイな子でして」

「じゃから謝意を見せろと申しておる」
話が噛み合わない。

「まあ——よい。幼子の事じゃ、これ以上詮索しても無駄じゃろう。いずれにせよ、振り出しへ逆戻り、というやつじゃな。御剣、東雲、桜、怠ることなく妖怪の源を探るよう、頼んだぞ」

お主だけが頼りじゃ、と姫は呟いた。

その後は一旦、雫たちは部屋でゆっくりと睡眠を取り、そうしてから、岬に詳しい話を聞くこととなった。そもそも何を云うにも寡黙で要領を得ない話しぶりであり、また先のように遊びながらのことである。半日がかりの大仕事であった。

兎に角はつきりと判ったのは——鴉と妖怪は何の繋がりもないこと、勿論岬自身も関係ないこと、鴉は社を、ひいては江戸を妖怪から護るためにいること、従つてあの鴉からの攻撃も、中途からは雫たちを試すようなつもりでやっていたらしい、ということ。

この近くまで鴉が飛んできていたのは強い妖怪の気配を察した昨日の夕暮れ時のみであり、勿論伽羅俱利屋を狙ったり、侍を殺したりはしていないこと。

また、岬には父も母もないばかりか何処で生まれ育ったかも判然としないこと、特別な研鑽を積んだわけではないが、あらゆる種類の鳥を思う

がままに操れるということ、殊更大福を好んで食べることに、雫と桜のことを気に入ってよく懐いていること、颯太のことが気に入らないこと、颯太には何をしてもいいと思っていること、などであった。

これらのことを聞き出すために、颯太は腰が立たなくなるまで馬をやらされ、顔に墨で落書きをされ、最後に尻を思い切り蹴られた。

「私は何か悪いことをしたか——」

無表情ながらも満足したらしい岬が厠へ行っている間に、めそめそしながら颯太は尋ねた。

「たぶんね」

胡座を搔いて改めて刀を確かめながら、雫は簡素に応じた。

そこでふと雫は、桜を見遣る。

愛らしい顔立ちをした少女は、部屋の隅で小さくなって座っていた。俯いて、じっと一点を見つめている。何かを真剣に思い悩んでいる様子であった。

「桜ちゃん、本当に大丈夫？」

「は、はい——」

雫に問いかけられると、少女は急いで頷く。

「何でも、御座いません——」

しかしそのいつも通り慇懃な口調も、今はどこか、精彩を欠いていた。顔色も悪く、落ち込んで、思い詰めたような表情をしていた。

雫はそんな桜の様子を、何も云わず眺めていた。

三

そうして、その夜。

雫は宿の脱衣所で念のため、周りに誰もいないことを確かめると、髪を解き着物を全て脱いで籠に入れ、息を吐いた。その吐息は、僅かに白くなる。どこからか吹き込んできた寒さに、雫はその凹凸の少ない細い躰を少し震わせた。

(大分寒くなってきたな……)

早くも冬の到来である。今日は終日ほとんど外に出ていないため、屋外

の変化が如何様なものかまだ知らないが、そろそろ紅葉も落ちきっている頃かも知れない。何ともせつかな話ではあるが、よく考えてみるとほんの数日の内に江戸の町の四季が楽しめるわけでもあり、そういう意味ではさほど悪いものでもないのかも知れなかった。

雫は湯殿に入ると、ゆっくりとその身を、湯船に浸けた。

この宿に泊まって今日で三夜目であるが、落着いて湯を楽しめるような気分で行るのは今宵が初めてである。初日の夜は当然不安だらけであり、昨夜は姫の命で湯どころではなかった。

檜の香りが、心を清める。

久方ぶりの安らぎを感じながら、しかし雫はこうも思った。

(どうやったら、元の世界へ戻れるだろう……)

鴉は空振りであった。あの戦いに懸命になれたのも、一つには鴉を倒すことで、絵巻の世界から抜け出すことが出来るのではないか、と考えたからであった。ところが、そう簡単にはいかなかった。

そうになると、次はどうしたものだろうか。再び妖怪の元凶らしきものを見つけ出して、戦って倒さねばならぬのだろうか。それしかない、というのであれば無論やるが、根拠がどこにもない以上、何となく無為ではある。そもそも、どこにその元凶らしきものがあるのか、今や見当も付かなかった。

(じゃあ……妖怪が巣くっているという武家屋敷や江戸城へ、突撃してみるか?)

しかしそんなところへ行ったところで、現れる敵の大半は雑魚に決まっている。遊戯と違ってそんなもの、いくら倒したところで得られる物はなく、喜ぶ人もいない。それに、いくら雫が無双の強さを誇るとは云え、無益な戦いはなるべく避けたかった。

その「邪鬼の魅の凝る処」というのをを直截に叩くのが最もよい。だからこそ、鴉との戦いも熱を入れたのだ。それが外れと判った今——果たして何処に狙うべき悪、倒すべき敵がいるのだろうか。

湯に顔を半分浸け、ぶくぶく息を吹きながら、雫は思う。

(こんなのんびりした調子で、そんな奴見つけることが出来るかな)

何となく、自分から以前のような必死さが失われていることに、雫は気

づいていた。今よりは昨日、昨日よりは一昨日の方が、帰らなければならぬという切迫感で懸命になっていた。

ところがその感覚は、次第次第に薄れてきている。そんな急いで帰らなくても、どこか思っている自分に気づく。

初日は、不安で一杯だった。訳も判らぬまま江戸時代に放り込まれてやぐざ者に絡まれ、何時殺されるとも知れない心地を初めて味わった。何が何でも帰らなければ、と思うだけの理由があった。

それが——日を重ねるごとに、意味を失っていく。

楽しいのだ。この虚言に過ぎない絵巻の世界で過ごし、ものを考え、人と話している、まるで泡沫うたかたの如き時間が、何故か掛け替えもないほどに楽しい。そう気づいてしまったのだ。何故なのかは、よく判らないが。

否——違う。

理由など、雫も疾うに判っていた。

脈絡なく、雫の頭の中に颯太の笑顔が浮かぶ。

馬鹿が付くほど、無邪気な笑顔だった。

(あー……もう。くそー……これは……ダメだ)

雫は目の真下まで湯に浸かると、目を瞑って、そのぼんやりした想いを忘れようとした。

その時だった。

雫は、扉の外に何者かの気配を感じた。

息を無理に押し殺し、誰かが雫の様子を窺っている。

手練れのようなではあるが、切羽詰まっているからか、堪えきれず洩れる吐息の音が聞こえた。

雫はあの、柱に突き立てられた棒手裏剣と文を思い出す。

(来た……か)

目を細めると、雫は湯船の中で身を起こした。無論丸裸で太刀など何も持っていないが、何とかなるだろうと踏んでいた。

ふ、と呼吸を整えると、雫はその曲者に声を掛けた。

「どうしたの？ 入っておいでよ」

「……桜ちゃん」

僅かに躊躇うような間が空いた後、からりと木戸が開いた。

其処にいたのは案の定、哀しげな表情で俯く、浴衣姿の桜であった。

「何故——私だとお判りに」

普段と違い、目を合わせようともしない。頭の後ろに両の手を当てて、雫は湯船の中で軀を伸ばす。あくまでも軽い調子で、こう応じた。

「いや、そろそろ……邪魔者の私を消しに来るんじゃないかな、と思って」

「——何をおっしゃいます、私はお背中をお流ししようかと」

「無理しなくてもいいよ。分かっているから」

雫は湯船の縁に片腕を寄せ、桜の方を見遣った。

「姫を狙うために、遣わされてきてるんでしょう？」

少女は顔を上げようともしない。

「まあ何かと事情に通じすぎてるな、というのは前々から感じてたけどね。凄く身軽だし。最初におかしいと思ったのは……あの、棒手裏剣と文の時から。いくらなんでも宿の奥過ぎたよ。普通なら、矢文か何かで済ませられる。ああやって文を残すには、宿の中にずかずか入って行って直接柱に突き立てないといけないからね。つつがなく任務をこなしたい忍が、用もなく危険を冒す意味はない。つまり、初めから宿の中に入り込んであれをやった、と考えた方が自然」

桜は下唇を噛んだ。

「あと変だと思ったのは、昨日の夜、姫にカラス退治への付き添いを命じられたとき。桜ちゃんだったらむしろ、御剣様と一緒にいきます、って無茶を言っただけ、それを私が何とかして諫める、っていう展開になるかと思っただけなのに、逆だったでしょう？ 姫に言われて桜ちゃんが困惑して、断ろうとした。あれが凄く意外だね。どういう理由があるんだろうとずっと考えてたんだけど……」

雫は可笑しそうに肩を揺らす。

「さっき岬くんに話を聞いて、やっと筋が通った。あのカラスが社以外の場所に来るのは、妖怪の気配を感じたときだけだって。手下の小さいカラスも同じで、だから私が夜中に宿の中で妖怪に追い回された次の日の朝には、宿の屋根の上に一杯カラスが留まってたわけ。でもそうになると、少し

おかしな事がある」

「何で、御座いますようか——」

桜は呟く。どことなく観念したようにも聞こえる。

「その日、私が妖怪に襲われた次の朝、姫の部屋で話してるとき、桜ちゃん言ってたじゃない。『昨日の夕方大鴉が宿に向けて飛んでいくのを見た』って。そんなはずないんだよ。その時点では妖怪なんて宿にはこれっぽっちも現れてないんだから。つまりこの言葉は、嘘」

「成程」

「あれはきっと、その前の日の別れ際、私と一緒に見たからだよね、富士山を横切って飛ぶ大ガラスを。それで思いついた。ガラスが増えたのも侍が襲われたのも、全部偶然で後付け」

下をずっと向いたまま、桜は何も云わない。

「で、それが何を意味するかというところ……何でもいいからガラスに結びつけて私たちを社の方へ行かせたかった、っていうことになる。町外れでそう帰ってこれない、あのお社へ。お社にガラスが祀られてるのも、知ってたんでしょ？ だってお社の場所をあれだけ正確に知ってたら、普通何が祀られてるかくらい、この時代の人だったら……あー、その、誰だって、ね、知ってるじゃない。まして桜ちゃんは江戸の町中を案内できるくらい詳しいんだから」

「はい」

か細く桜は肯った。

「つまり、何も起きていないうちから桜ちゃんは、あの大ガラスとお社を使って人払いをしようと画策していたわけだ……さて、桜ちゃんは用心棒である私と颯太を追い払った後、姫と二人きりになって夜中の宿で何をしようとしていたんでしょう、っていう……そういうこと」

「——お見それいたしましたッ」

桜は顔を上げぬまま、湯で濡れた床に片膝を付いた。

天井から水滴が、ぽつりと音を立てて湯に滴り落ちる。

軽く息を吐くと、雫は静かに問うた。

「桜ちゃんは……何者なの？」

「私は——將軍様の御庭番、伊賀組の、くのいちに御座います」

これまでとは少々異なる張りのある声でそう応えられ、ああ、と雫は納得する。そう云えば絵巻にも、忍者の絵が描き込まれていた、と思いついた。

先の鴉との闘いするときも、桜は銃を撃つよりもまるで手裏剣を投げるように直截ぶつける方を得手としているようだった。それもやはり、忍故のことなのであろう。

「女忍者……だよね」

「左様に御座います。將軍様直直の命を受け、淨瑠璃姫を藩邸へ連れ戻しに隠密として参った次第。初めのうちはまだ連れ戻すだけでよいと云われておりました。ですからあのような脅し文句を貼り付け、宿の者を怯えさせて帰らせようと。しかし私が力及ばず、なかなか上手く事を運べなかつたがために、業を煮やした上様は——」

「殺せ、と？」

はい、と桜は心底辛そうに頷いた。

「人づてにはありますが、昨日そう聞き及びました。姫様にもお目掛けいただいておりましたゆえ内心煩悶いたしました。これでも忍の端くれ、何とかせねばと心を殺し、それで結局、御剣様を謀るような真似を——」
本当に、申し訳御座いませんでしたッ」

泣き出しそうな声でそう云うと、桜は濡れるのも厭わず湯殿の床に平伏した。雫は慌てる。

「ちよつとちよつとちよつと、桜ちゃん、風邪引くから……」

「私など、風邪でも拗らせて永遠に伏せっておればよい、真実、真実救いがたき愚か者の極みに御座いますッ。あろう事か私如きが御剣様を利用しようなど、五十六億七千万年早い分不相応な所行」

「そこまで遜らなくても……とにかく顔を上げて」

流石の雫も少し引いてしまうが、桜はびったりと伏せたまま動こうともしない。顔も髪も浴衣も既に湯でべたべたになっている。

「と、とんでもないことに御座いますッ。そしてそのまましておきながら何もかもが失敗し、上様の命も守れず、御剣様にもご迷惑ばかり掛け、あまつさえ妖怪退治の用も果たさず、何一つお役に立たぬまま。くのいち失格どころか人としてどうしようもない、正に捨て草」

繰り返し繰り返し頭を床に擦りつけると、最後に桜はこう云った。

「私など、生きている価値もない塵芥ちみのような者に御座いますッ」

「……いい加減にしなさい」

雫はゆつくりと、云った。桜は僅かに顔を上げると、潤んだ目を円くして呟いた。

「——は」

「役立たずとかゴミだとか……」

湯船の中にもたれ掛かったまま、天井の隅の方を眺めつつ、雫は淡淡と述べる。

「……そんな人と仲良くしてた私はどうなるの？ ゴミ仲間？」

「と、とんでもないッ」

御剣様が私如きにお付き合いくださったことこそこの上なき僥倖げんじょう、と早口に桜は云う。呆れ半分に雫は苦笑した。

「あのね、私は、そんなゴミ屑みたいに役に立たないでしょうもない人とは、初めから付き合ったりしません。大体……役立たずって、誰にとつての話？ 桜ちゃんに町を案内してもらって、どこかのおバカとあっちこちぶらぶらして、私は楽しかった。私にとっては充分に役に立ってるお友達。でしょう？ 上様がどれだけ偉いか私の知ったこっちゃないし、くのいちとしての仕事がどれだけ大事か私にはよく分からないけど……でも桜ちゃんは、それだけしかない人間じゃないんだから。あなたは私にとつて、ゴミでもないし、役立たずでもない。それじゃダメかな」

楽しく過ぎさせてくれて、本当に有難うね、と雫は笑って告げた。

雫の話の途中からだからだと涙を流し、ぐすぐすと鼻を鳴らしていた桜は、やっとのことでこう想いを伝えた。

「桜は、果報者に御座います——」

再び首を落とした桜を見て、雫は頭を搔いた。

そうしているうちにふと疑問を思い出した雫は、これを機会と桜に向かって話しかけた。

「桜ちゃん、ちよつと訊きたいことがあるんだけど」

「——はい」

桜は赤くなった眼を雫に向ける。

「姫を殺せと命じてきたのは、間違いなく將軍様？」

「左様に御座います」

「あの廊下に貼り付けてあった手紙は？」

「命を受けた時に頂戴したものを、そのまま打ち付けただけに御座います。どなたがお書きになったものかは存じません」

「じゃあ、この前云っていた、藩邸やお城がおかしい、つていうのは、あれは嘘なの？」

「あれは——」

鼻を吸ると、桜は一瞬口籠もった。

「あれは、事実半分、噂半分とでも申しましょうか——兎に角、姫様のお屋敷の様子が尋常に非ず、と云うは真のことに御座います。ぴったりと戸が閉じられ、中には入られぬ状態には御座いましたが、私自身もしかとの目で確かめました。ただ、江戸のお城や上様のご様子が、と云うのは、これは口さがない噂、と申しますか、私がそう感じた、と申しますか」

「どこをどう、そう感じたの？」

「全てが、で御座います。浄瑠璃姫様がお屋敷から逃げてこられているのは紛う事なき事実。本来ならば、お屋敷の異常を確かめ、姫様をお守りするの筋に御座いましょう。にも関わらず上様もご家老様も、姫様を捕らえて参れ、生死は問わぬの一点張り、加えて詮索は一切無用、のお一言。そればかりか、江戸の外での妖怪との戦も、これまでずっと忍の者が通伝の役を務めて参りましたが、近頃では上様からも、すっかり見限られたかのように何のお達しもなく——いずれにせよ、ただ事では御座いません」

時折ひくひくと吸り上げながら、桜はこう話した。

「そっか、姫を狙う理由も事情も分らないんだ……」

雫は口元に手を当てると、考えを巡らせた。

（何か、どこかがおかしくなっている……）

どこかで、大変な過ちを犯している気がする。

ただそれがどこなのか、雫には判らなかった。

「——それ故、この桜、これ以上上様にお仕えする自信が、御座いません」

次第次第に声を落としながら、桜は続けてそう云った。また俯いていく。同情もあって、雫は取り敢えず考え事をやめると、桜へ優しく声を掛け

た。

「そっか、それは……」

「はい」

雫はそのまま慰めようとしたのだが、その前に向こうから妙に強い返事が来たため、思わず言葉を切った。

桜は敢然とした調子で、こう続ける。

「実を申しますと、今こうして此処に参りましたのも、御剣様をどうにかしようなどと大それた事を考えてでは御座いません」

「はあ……」

話について行けず、雫は間の抜けた合いの手を入れる。

桜は突然くっ、と顔を上げると、

雫に向けてこう云い放った。

「御剣様、この桜を——お手元に置いてはいただけないでしょうか」

「え!？」

唐突と云えば余りに唐突な申し出に、雫は啞然となる。

「そもこのように幕府の内情を明かしてしまった以上、最早お城に桜の居処は御座いません。直に知られるところになれば、忽ち見つけ出され、重ねて四つに斬られるが落ち。裏切り者の汚名を着るくらいなら、信じがたき主の元を離れ、心からお仕えできるお方に付くがよいと、そう思った次第に御座います」

「さ、さようでございますか……」

どう応答してよいか判らず、雫はひたすら困惑する。

「先の鴉の護神様との戦いのおときも、この身の程知らずを木刀一振りで華麗にお救いくださいました。強き尊き御剣様には、海よりも深きご恩が御座います。どうかどうか御剣様、この桜を、お側に置いてくださいまし」

陶酔したかのような眼差しで、澀むことなく桜は言い募る。

「身を粉にして働きます。水だけ与えておけば生き延びます。くのいちとして役に立たずとも、馬子、端女、飯炊き——いっそ、いっそ慰み者にもッ」

「さ、桜ちゃん……?？」

先とは違う意味で雫は慌て出す。雫は単に今まで通りの友達づきあいを

ヤイヤイヤ、ちよつと、ちよつと待つて！」

「もう待てませぬ。御劍様が浴室へ入って参れとお申し付けくださったその刹那から、この桜、覚悟しておりました——」

雫としては女同士だからどうということはないと思っていたのだが、考えてみれば桜にとつてこれは、誘い文句以外の何ものでもない。

（息が荒かったのもそれか！）

漸く雫は察したが、今更遅い。

「重重承知しております。私が如き色気のない者の躰、いくら目の前にしたところで何もお感じになりませんでしょう。ですが私は」

「え、いや、別にその……綺麗だと思」

「まじこ真実に御座いますが御劍様ッ」

すっかり裸になった桜は頬を赤らめ目を輝かせ、これも裸の雫にびつたりと抱き付いてきた。

濡れた肌と肌の触れる感触がやたら生々しい。相手の男女関係なく、雫はこのような心地になるのは生まれて初めてである。頭が真っ白になって、どうしてよいのかも全く判らない。

「御劍様ッ、わ、私は——」

「あ、あの、桜ちゃん、桜ちゃん！」

必死に抑制心を働かせ、無理矢理桜を引きはがす。きよんとした目で桜は雫を見返していた。何故この期に及んで雫が躊躇うのか判らぬらしい。荒い息の中で少女は云う。

「御劍様、失礼ながら、据え膳喰わぬは——」

「わ、私に、私にそのケはない！」

泡を食った雫は訳も判らぬままいきなりそう云った。経験したことはないが、多分ないと雫は思う。そして目の前の桜の綺麗な胸を見て、程良い美乳、お前もか、などとどちらでもよいことを考えた。

雫の言葉に衝撃を受けたらしい桜は、突如として大声を出した。

「そ、その毛、とはどの毛に御座いますかッ」

「へっ？」

「否否、何処の毛でも構いませぬ。御劍様、ということはおおなご女子にご興味があらせられぬので御座いますかッ」

「そう、だからそれ」

云ってしまつてから雫は自分の口を押さえた。

間違えた。

今自分は男のはずだった。

しかしこうなるともう——桜は止まらなかつた。

「何と云うことに御座いませう何と云うことに御座いませうッ、肝心の所をお訊き申さず勝手に懸想していた桜が悪う御座います。お恥ずかしゆう御座います。御剣様は女子にご興味があらせられぬと。流石は剣の道を究めしお侍様、しだらなき女遊びなど——否、むしろ、この場合——さては、衆道のご趣味をッ。成程それならばよく判ります。昨今けして珍しいことでは御座いませぬ故——ハッ、と云うことは、と云うことは、し、し、東雲様とッ」

「え。あ、あのそれは」

衆道。

確か、男と男の愛の語らいのことであつたはず。

——颯太と、私が。

どこまでも話が妙な方向へ流れ出して、汗を流したばかりというのに雫はまた妙な汗を掻き始めた。浴室は湯気以外の何かから来る熱気で包まれている。一方で桜の妄想は止まらない。

「桜ちゃん、桜ちゃん……!?!」

「ああああ何と云うことに御座いませう、目前にてあれだけ親しげにされておきながら何も察せず、桜は真まことに愚か者で御座います。疾うに気づいておくべきでありながら。お二人が、そ、そのような仲と。しかし御剣様、お聞きください。この桜、身も心も御剣様に捧げる覚悟に御座います。如何に足蹴にされようと邪険に扱われようと、喜んでお仕えいたします。どうぞお好きにお使いください。桜は、桜はもう——ああああ何と云うこと」

無茶苦茶を云いながらも桜はどこか生き生きとしている。出会った頃の淑やかな印象などどこぞへ消し飛んでいる。ずっと猫を被っていたのか、それとも頭の中は以前からこのような状態だったのか。自分の云ったことを自分で聞いて、それに自分で昂奮しているようだった。雫はかつてなく

酷い偏頭痛を感じた。

雫と颯太が男同士で深い仲にあり、そんな中自分は雫に片思いをし、叶わぬ恋と知りながら健気に仕え、日々酷い扱いを受けながらもそれに倒錯的な喜びを感じている、という筋立てを考えて、桜は一人で大いに盛り上がっている。最早妄想どころの騒ぎではない。

雫は思った。

——変態くのいち。

己の妄想だけで身悶えしている全裸の少女をどう扱ってよいか判らず、雫は暫し頭を抱える。

するとそんな隙を逃さず、熱っぽい顔をした桜は再び雫に飛びつこうとした。

「み、御剣様、どうか、どうかこの私と——ッ」

「わああああああああ」

つい、雫は脇に避けてしまった。

そして。

湯船に思い切り頭を打って、桜は気絶した。

四

翌朝、目を覚ましたときも、まだ雫は如何ともし難い感情を胸に抱えていた。躰を起こし、昨夜のことを思い起こす。

気絶した桜を浴室から引つ張り出し、躰を拭き、新しい浴衣を着せ、自分も着替えてから宿の者たちに何とか言い訳をして部屋に戻す。そうして目を回している間も桜は讒言で、御剣様、愛しております御剣様、と繰り返して呟いていた。

——嗚呼。

雫は大きく嘆息する。ああいう娘は嫌いではない。誠実で、確実に悪人ではないし、信頼できる仲間が出来たことは雫も嬉しい。

しかし。

同性の友に絶えず貞操の危機を感じながら過ごさねばならぬということには、喻えようもない虚しさを覚えた。加えて自分は男だと云っているの

だから、桜に嘘を吐いているわけで、あまり気分もよくない。どう言い繕ったところでこんなこと、すんなり解決するとも思えず、雫は桜の顔を思い浮かべ、心の内で謝るほかなかった。それにしても。

一体城では、何が起きているのだろうか。雫は考える。くのいちを送り込み、姫の命を狙うなど、余程のことがあるのしか思えない。そして仮に桜の推測通り、城が既に邪鬼の魅に囚われているとしても、果たしてあの浄瑠璃姫に、何かあるというのだろうか。屋敷で何かを見てしまったのか。それとも、妖怪あかしを打ち倒す、秘密の力でも備えているのか。

加えてその場合、雫には何が出来るかと云えば、ただ愚直に姫をお守りする他何もないのである。勿論出来るだけのことはするつもりだったが、しかし、そんなことでよいのだろうか。そんなことで、この絵巻の世界から抜け出すことが出来るのだろうか。何かもつと、きっかけになりうるものを探すべきなのか。

やはり魅の凝る処を、打たねばならぬのだろうか。それにしたって、どうやって。

「……ふう」

と首を振ると、雫は際限ない悩みを取り敢えず、脇に退けておくことにした。自分の手には負えない。そして、より切実な問題を考えることにする。

昨夜の桜の、滅茶苦茶な三角関係の妄想を思い出した。

—— 颯太と私がつて、何。

ある意味では正しい憶測だと雫も思うし、その意味で二人の間に嫉妬するのは的確かも知れないが、その他大半の意味では著しく間違っている。そういうところも大層虚しい。

そうして何となしに、雫は隣で眠っているはずの颯太を見遣った。ところが。

その布団は、空だった。

雫は首を傾げる。

岬は部屋の広さの関係で、桜の部屋で共に寝ている。この部屋には雫と颯太の布団だけが並べて延べてあるが、颯太の姿は既に見当たらなかった。

いつも一番寝坊する颯太が、一体どうしたのだろうか、と雫は怪訝に思った。

それに今朝は、いやに寒い。

この世界の冬が近づいているとはいえ、一様の寒さではなかった。外からの光の量から云って、まだ満足に日も昇っていない早朝のようだったが、それにしても冷えている。雫でさえ布団から出る気がしない。ますます颯太が早起きした理由が判らなくなった。何かあったのでは、と不安にもなる。

その時、ふと雫は考えた。

——颯太なら、どんなとき早起きするだろう。

寒いけれど、早起きするとき。

そこまで考えて、雫は不意に、もっと幼い頃の心沸き立つ懐かしい記憶が蘇るのを、胸の内に感じた。

——成程、そう云うことか。

雫は布団を跳ね飛ばすと、急いで着物に着替え、部屋を出た。

宿の玄関から外へ出ると——。

そこは、一面の雪景色であった。

天からしんしんと降る雪が、道に、屋根に、そこかしこに優しく柔らかく積もっている。地味な色合いが続く江戸の町が、この時ばかりは冷たく美しい静寂に包まれていた。

足元を踏みしめると、ぎゅ、ぎゅと音が鳴る。

何となく、雫は嬉しく感じた。

腰を落とし、掌で雪を掬い上げる。

ひやり、と刺すような冷たさを感じる。

そして。

雫には、未だ判らなかった。

この雪の手触りは、疑いなく真実まことのもの。

この眼に映る景色も、この町に漂う薫りも、この雪から聞こえる音も、紛う事なき真実まことのものである。

桜と話したことも、岬と遊んだことも、巴と笑ったことも、姫と出逢っ

たことも、

颯太に恋をしたことも、

どれもこれも雫には、真実のこととしか思えなかった。

而して、これは虚言であるという。泡沫であるという。

このまま絵巻の世で生きたなら、

これが現実になるのだろうか。

それとも己が幻となるのだろうか。

何が現実で、何が幻か。

雫には、判らなかつた。

判らなかつた。

声が、聞こえた。

「雫」

振り返ると、そこには颯太がいた。

「起きたか」

雪を僅かに頭に積もらせた颯太は、いつもと変わらぬ無邪気な笑みを浮かべて、其処に立っている。雫は頷く。

「うん」

「目を覚ましたら外が静まりかえっておった。空気も冷たい。これは雪に違いないと矢も楯もたまらず、こうして飛び出した。案の上だ。冬はこればかりが楽しみだ。雪は——よいものだ」

よいだろう、そう思わんか。

翻って町を見遣り、颯太はそう云った。

「夏は蒼き草葉が生い茂り、熱き風が血気を沸き立たせる。秋は晴れ渡った空に枯れた薫り、満月も美しい。冬はこうして雪が降る。そして春は——桜舞い散り、新たな始まりに心躍る」

どの季節も、楽しい。

道の真ん中に立ち、颯太は笑った。

「どの季節であっても、この町は見飽きることがない。何が起ころうとも、この世に倦むと云うことがない。私はな、雫——」

雪は空から生まれ来るように、静かに静かに降り積もる。

どこまでも澄み切った、純真な眼をこちらに向けて、

颯太は雫に、こう云った。

「私は、今のこの町が、この時代が、大好きだ」

雫は、どうにも愛おしくなつて――。

ただ優しく、肯った。

五

暫くしてから、雫は颯太と共に宿の内へ戻った。丁度、桜が岬の手を引いて部屋から出てくるところだった。雫は謂れもなく緊張した。

一方の桜は、幸か不幸か昨晩の終わりの方で何があつたか今ひとつ思ひ出せぬ様子であつた。頭の瘤をさすりつつ、首を傾げながら失礼を致しましたとべこべこ頭を下げるので、雫は照れ隠しに頷いておいた。一応、自身の正体を明かしたところまでは憶えているようだった。

岬はと云えば、相も変わらず無表情の無愛想で、昨日と同じ着物を着ている。桜より先に起きて、部屋の窓から呼び寄せた鷹の世話をしていたらしい。しかし雫の姿を眼にすると、黙ってすたすたと寄つてきて、そのまま何も云わずに手を取った。これでも懐いてくれてはいるようである。雫は微笑んだ。

そうして、四人揃つて雫たちの部屋で朝食を食べているときであつた。膳を運んできた女中が、ああそうそう、と思ひ出したように云った。

「姫様が、お躰の調子がお悪いとかで」

「え、大丈夫なんですか？」

「心配は要らぬ、ただの風邪じゃ、伏せっておるゆえ入ってくるな、と、こうおっしゃつておいででしたよ」

とその淡白な顔だちの女中は雫に伝えると、失礼いたします、とそのままいそいそと部屋から出て行った。

「急な寒気ゆえ、仕方あるまい」

と颯太は肩を竦めた。しかし、雫は眉を顰めた。些か不自然である。

――もしや、何事かあつたのかも知れぬ。

早々に食事を終えると、雫は腰を上げる。念のため叢雲むらぐもの刀を持ち、廊下へ出ると、姫の部屋へ向けて一步を踏み出した。

「くしゅん」

姫は布団の中で、顔を赤くしている。

「じゃから何故入ってくる」

雫は脱力した。横では半目の颯太が、腕組みをして雫を見ている。考え過ぎのようだった。

後から岬をつれて桜が入ってこようとすると、姫はぱたぱたと手を振る。

「これこれ、幼子を入れるな。感染かんするではないか」

そうしてまた、こほこほと咳をした。部屋の隅には女中が持ってきたらしい、小さな火鉢が置いてある。その向こうの壁には、未だにあの紙で出来た雛人形が立てかけてあった。

桜が襖を閉めて岬と共に元の部屋へ戻っていくと、じとり、と姫は目を細めて雫を見た。雫は弁解する。

「いえその、状況が状況だけに何かあったのではと」

「何かあったら何かあったと申すわ。で、今日はどうするのじゃ。雪が降ったら休みか」

「いえ、あの、ですからどうしたものかと。その辺も含めて出来れば今からご相談を……」

「——何やら、騒がしいな」

すると、颯太が襖の向こうに目をやって云った。

確かに、廊下からぱたぱたと行き交う音や、女中らしき者の怯え声が、頻りに聞こえてくる。奉公人の躰たのなっている伽羅俱利屋がらぐりやにしては、珍しいことであった。

その時、いきなり襖が開き、巴が顔を出した。

久久ひひびに髪が乱れている。そして、初めて見せる深刻な表情をしていた。

「ごめんなさいよ。ちよっとね——厭いやな噂が入ってきてね。うちの娘たちも動揺どうごしてるんだよ」

「どうしたんですか」

雫が尋ねると、巴はすつと部屋の中へ入ってきて、襖の前に腰を下ろし

た。

「——町の外の、妖怪どもとの戦がね。何でも、幕府方が劣勢に立たされているらしくて」

「それって……」

「まだ噂だよ。はっきりしたことは判らない。でもこのまま妖怪どもの軍勢が勝ってしまったら——連中は、迷わず町へ攻め入ってくるだろうね」
低い声音で、巴はそう云い切った。雫は到底、信じる事が出来なかった。

「でも……何故いきなり？ これまで何とか堪えていたわけでしょう？
なのに、ここへ来て突然劣勢になって……」

いくらなんでも急すぎやまいか、と雫は疑問を感じる。

——何か、きっかけがあつたのではないか。

——何かが、起きたのではないか。

「判らないよ。突然妖怪どもの力がぐんぐんと増してきたらしい、なんて話もある。それにしたって理由が判らないが——何にせよ、窮地に追い込まれていることは事実みたいだね」

そう聞いて、雫たちは沈黙した。

「何と云う事じゃ——何と云う」

熱のせいで気弱になっているのか、浄瑠璃姫は布団の中で目を瞑り、身を震わせると幾度も幾度もそう呟く。

「そうなつたが最後、江戸の町は——お終いだよ」

巴がぼつりと洩らすと、やおら颯太が立ち上がった。

「おい雫、何をしている。何とか、何とかせねばいかんだろう。落ち着いている場合ではないぞ。何か、手を打たねば、何か——」

慌てふためき、居ても立ってもいられない様子でうろろと部屋の中を歩きまわった。他方で、雫も焦っていた。

昨日の晩、桜が云っていたとおり、やはり將軍からの命が途絶え、幕府軍は迷走しているのであろう。はっきりとは判らないが、それが劣勢に立たされた理由の一つには違いあるまい。これで城、そして將軍が、尋常ならざる状態にあることは確かめられた。

——だが。

確かめられただけで、雫には何も出来なかった。

蒼い顔で無為に狼狽する颯太を、雫は下を向いたままで諫める。

「分かっているよ。分かっているから、颯太……姫、淨瑠璃姫。どうかお教えください。お城は、妖怪どもは、何故姫様を狙っているのです。何故姫様のお屋敷は、妖怪どもに乗っ取られたのです。姫様には、どのような秘密があるのです。一体何が起こっているのですか。何か……何かご存じのこととは、ないのですか!？」

「知らぬ。わらわは——何も、知らぬ」

消えゆきそうな声で云うと、姫は布団の中に縮こまってしまった。雫は頭を抱えたくなくなった。

往來の音は雪に吸い込まれ、聞こえてくるのはひたすら宿の内のざわめきばかりであった。

六

それから、少し経って。

雫は今、宿の表の軒の下に立っている。

傍らには桜がいて、心配そうに雫の顔を見ていた。

未だ雪は、しんしんと降り続けている。

「——御劍様、どう、なさいますか」

「うん……」

どうすればよいのか、雫には皆目判らなかった。

目の前の通りでは、颯太が岬と二人で一所懸命に雪達磨ゆきだるまを作っていた。

颯太は胴を、岬が頭を作っている。二人で競い合って、どちらもやたらと大きな玉になっていた。仲がよいのか悪いのかよく判らぬ。

「颯太。風邪を引くよ」

雫がそう声を掛けても、ああ、とかいう生返事しか返ってこなかった。

霜焼けで手を真っ赤にしているというのに、気にも留めていない。無心で遊んで、厭なことを忘れようとしているのだろうか。

「おい岬。釣り合いというものを考えろ。胴より大きい頭があるか」

颯太はそう云って、岬に思い切り雪玉をぶつけられている。

やり返している内に、雪合戦になっている。

そうして仕舞いには、岬の鷹に追い回されて大騒ぎになっている。ただ遊んでいるようにしか見えぬ。

雫はふう、と息を吐く。

——まああれはあれで、気を張っているのかな。

姫の部屋から出た後は、それでも暫く塞ぎ込んだ様子だったのだ。

遊ばせておいてやるか、と雫は思った。

そうしている内にも、事態は刻々と進んでいるようだった。ただの噂に過ぎなかったはずの戦の話が、町中にも広がりだしているようである。其処此処に立つ人人は互いに話しては、怯えている。これまでとは明らかに違う、得体の知れぬ不安が、そんな町人たちの顔色から窺えた。雪道を駆ける童たちも、そうした大人の畏れを鋭敏に感じ取って、折角の雪遊びにもどことなく気が入っていない。時には、荷車に家財を乗せて行く者すらいた。

しかし、何処へ逃げるといふのだろうか。

——所詮この世界から、逃れることは出来ぬと云うに。

「御剣様。私でよろしければ、城に忍び入って探って参りますが」

不意に、静かな口振りで桜は云った。

突然の申し出に、一瞬雫は迷った。頻りに謙遜してはいるが、桜ならば、何かしらのことは掴んできてくれるだろう。それに向こうは、桜が雫の側に付いたことをまだ知らぬのだ。邪鬼の魅に取憑かれた何かが、あの橋の向こう、武家屋敷や城の中には、いるのかも知れない。

しかし、逡巡した末、雫は首を振った。

「いや、いいよ」

「御剣様——」

「桜ちゃんを信じていない訳じゃない。ただ……」

雫は、己の腰に差した叢雲の剣を見遣る。

この刀は、斬れる物を斬らず、斬れぬ物を斬る刀であると云う。

雫は想像する。例えば桜が掴んだ事実を元に、何とかしてあの城へ攻め入る。立ち籠める邪鬼の魅に侵されて、城の従者は正気を失っているであろう。何処に魅の凝りが潜んでおるかも知れぬ。

ならば、その根源に至る前に、雫は無用の殺生をせねばならぬ。
城を守るため襲い来る侍どもと、剣を交えねばならぬ。
勝つか負けるかの問題ではない。

この刀は、そのような使い方をするものではないのだ。

間違っても、人を殺すためのものではない。雫はそう信じる。臆病者と
嗤われようが軟弱者と詰られようが、この清純な太刀が悪意のないただの
人を斬るために使われるのは、誤りだと思う。そんなことをしては、喩え
江戸の町を護ったところで、誰も救われぬ。誰よりも、雫自身が報われぬ。

そして颯太も、そんなことは望まないだろう。
そんな悔いを残しては――。

意味がないのだ。

「――御剣様」

ふと、桜が呟いた。

「もしや御剣様は――お望みではないのではありませぬか」

「……何を？」

「邪鬼を――打ち倒すことを」

意識しないまま思いを零すように、誰へともなく桜はそう云った。そう
してすぐに、はっ、と己の口を塞いだ。

「も、申し訳ありません。このような差し出がましいことを――私とした
ことが、御剣様に永久の忠誠を誓ったと云うに、わ、私は」

「……いいよ。いいよ」

気にしないで、と雫はそんな桜の背を撫でて、落着かせた。

そうかも知れない、と雫は思った。桜を行かせたくないのは、本当はそ
れが理由なのかも知れない。

――まだ、終わって欲しくない。

そう、どこかで思っているのかも知れない。

以前に自身で思ったことを、雫は振り返る。

物語は、何時しか必ず終わるのだ。

無念が残ろうと、悔いが募ろうと。

お話は終わってしまう。

邪鬼を倒せようと倒せまいと、きっとそれは、同じことだ。

次第次第に、雫はそう気づき始めていた。

自分が如何にして帰るか、どうやったら此処を去れるのか。初めは雫も、そんなことを考えていた。正しい道を通らなければ、この物語は終わらない。自分は帰ることが出来ない。だから、どうしたらいいのか。そんな風に考えていた。

けれどそれはきつと——雫の驕りに過ぎない考えだったのだ。

雫が何をしようが、どう考えようが、そんなものは関係ない。時は経つ。

物語は進んでいく。ただ右往左往しているだけで、万事は流転し、四季は巡り、芝居は終幕を迎える。そういうものなのだ。雫が望むと望まないと、関係ない。当然のことだった。

絵巻の世界は、何時しか終わる。

何が起きようと、物語は終わり、そして雫は此処を去る。

別れの刻が、迫っている。

ならば。

雫に、何が出来るだろうか。

「出来た」

達磨の頭を載せ終えると、満足そうに颯太はそう云った。

そうして、少し離れた処から、その出来映えを眺めている。

眼を輝かせ、心の底から嬉しそうに、笑っていた。

雫は、ただそれを見ている。

——何が、出来るだろうか。

「夜になれば、妖怪は一層勢いを増します」

桜はまた、口を開いた。

「幕府方の軍勢が持ちこたえるのも、町の守りが保たれるのも、恐らくはその時まで。破られたが最後——全ては、終わりを迎えます」

雫はほう、と息を吐いた。

吐息は、真っ白に揺らめいて何処かへ消えた。

雪は、降り続けた。

そして――。

何も出来ぬまま、夜が来た。

七

雫は暗い部屋の隅で刀を握り、壁にもたれて座し、黙している。部屋には颯太、桜、岬、巴がいる。誰も何も云わない。動こうともしない。姫は未だ、己が部屋で伏せたままだ。

宿の中は、人っ子一人いないかのように静まりかえっている。

町は、死に絶えたように夜を湛えている。

――このままでは、いけない。

口を一文字に結び、雫は強く、そう思った。

その時。

事は唐突に起きた。

ごう、と異様な音が、外から聞こえた。

燃えたぎる何かが、凄まじい勢いで飛び行くような――。

雫は素早く腰を上げると、窓に駆け寄り障子を開き、外を見た。

「あれは……」

眼を疑う光景だった。

空には――炎に包まれた大きな獣が、浮かんでいた。

獣は、眼を覆いたくなるほどの禍禍しい貌をしていた。その虚ろな眸には、何も映し出されていない。何処も視ていない。その身の内には、ただ邪念のみが渦を巻いているように思われる。口を開く度、ちろちろと暗い色の緋炎が漏れていた。

「火車――」

何時の間にか横に来ていた颯太が、小さく云う。

ぱちぱちと、炎の爆ぜる音が此処まで聞こえてくる。

妖怪は、小さく唸り叫ぶと、

この世の果てまで響き渡る醜怪な鳴き声を高高と上げ、

その身をぐるりと、夜闇の中で舞い巡らせた。

そうして暴れまわる度に、飛び散った炎が——江戸の町中に降り注ぐ。

「いかん——」

颯太が、眼を見開いて呟いた。

飛び散った数多の妖しの炎は——。

たちまち江戸の町を、火の海にした。

半鐘の音が、鳴り響いた。

「いけない！」

雫は部屋を飛び出し、暗い廊下を駆け抜け、宿の玄関から表へ飛び出す。

颯太も桜も、岬も巴も、その後へと続いた。

玄関先で立ち止まった雫は、外の光景を見て絶句する。

「……そんな」

既に宿の周囲では、怪異の炎が燃え広がり始めていた。

明らかに天然自然の火勢ではない。元元雪が積もっていたのだからそこまで燃えることはないはずなのに、そんな理を無視するかのように、それほどばかりか雪までも燃やし尽くすかのように、炎はじわじわと、辺りの建物を侵し始めていた。炎の影が、煙の揺らぎが、町の全てを覆い尽くす。雪が炎を上げて、燃え上がっている。

そしてそれに紛れ込むようにして——。

妖怪たちが、一斉に姿を現した。

家家の瓦屋根を音を立てて飛び移る、奇怪な黒い影があった。薄暗がりから、女の貌をした丸太のような蛇くちなわが、長い胴をぞろぞろと蠢かし這い出てきた。向こうに建つ米蔵の壁一面には、人よりも遙かに大きな蜘蛛が数匹、へばり付いていた。

炎に驚き慌てふためいて家から出てきた江戸の善良な町人たちは、表に出るや否やそうした怪異に出会であい、あちこちで叫び声や悲鳴を上げていた。薄汚い男の首が、ごろごろと道の脇を転がっていく。ぼそぼそとそれが

眩いているのは、経文のようだった。ふと見れば、あちらの角を大入道がゆつくりとのし歩いていった。

一本足に一つ目の化物が、嬉嬉として飛び跳ねている。立ち昇った煙が、人の像かたちを取って幽霊のように揺らめいている。女の着物を着た骸骨が、ふらりふらりと彷徨っている。

ふと見上げれば——夜空に融け込むようにして、髪振り乱したお齒黒の女の巨大な貌が、浮かび上がっていた。

それはただにたにたと嗤って、雫たちを見下ろしていた。

雫は思った。

——百鬼夜行だ。

その時突然、雫たちの目の前の中空に渦を巻いて、黒雲がたなびいた。

かと思うと次の瞬間、中から大きな牙を生やした口が現れ、雫たちに向けて避ける間もない勢いで迫り、食らいついてきた。

「きやあ——」

桜が悲鳴を上げ、蹲うずくまる。颯太は僅かに身動みじろいだきり逃げられない。

しかし雫は抜刀一閃——。

眼にも止まらぬ速さで、それを斬った。

口はそのまま、何処かへと掻き消える。

「御剣様——」

何かを訴えかける必死の目をして、桜が雫を見つめる。雫は下唇を噛んだ。判っている。このままここには拙まづいことくらい、雫も重重承知していた。けれどこのまま、ただ立ちつくすだけで引き下がりはなかった。せめて何か、何か少しでもしてから——。

すると——。

何処からか、男たちの野太い雄叫びが聞こえた。

熱気で揺らめく宿の正面の大通りを、向こうから何かが妖しげな影が、走ってくる。

あれは——馬だ。滾たぎる炎を物ともせず、影のような黒毛の馬が、幾頭も幾頭も走ってきている。その鞍上には、甲冑を身につけた、異形の武者たちが在った。

貌にはびつたりと、濃い血の色をした鬼の面を嵌めている。刀を高く上

げて振り回し、激昂の声を上げ、右往左往する町人たちを無情にも威嚇する。

人の姿はしていても、間違ひなく人ならざる者たちだった。

——いけない。

「……一旦、中に戻ろう」

雫は後ろの四人に向けて云った。体勢を立て直さなければ、今のままでは何も出来ぬ。口惜しいが致し方ない。

雫たちがそうしている間も、炎は留まるところを知らず囂囂しやうしやうと音を立てて燃え盛り、広がり続ける一方であった。今や江戸の町は、天に舞い踊る火車の怪によつて、真昼の如く明明あかあかと照らされ、そしてそこかしこを、我が物顔で妖物が闊歩していく。

町のあちこちから、人人の悲痛な叫びが聞こえる。

颯太や桜を先に行かせ、渋渋ながら宿へ戻ろうとした雫はふと、目前の道はずっと行った先に、何か物が寂しく転がっていることに気づいた。

それは、鞆だった。

炎に揺らぐ道の真ん中に、小さな鞆が一つだけ、落ちていた。

雫は齒を食い縛ると、宿の中に駆け込んだ。

八

しかし宿の中も、右へ左への騒ぎになっていた。

女中たちがどたばたと足音を立てて廊下を走り回っている。中には、泣き叫んでいる者もいた。無理もない。そして恐慌に陥った他の客たちは、ろくに着物も身につけないままに部屋から飛び出し、半ば腰を抜かして逃げ惑っている。その内の走ってきた一人が雫に肩をぶつけ、そのまま振り返りもせず玄関口から外へと飛び出していった。

「アンタたちッ。なんだい情けないね。少しは落ち着きなッ」

巴が手を叩き声を張りながら、騒乱の奥向きへ入っていく。女たちは巴様、巴様と震えながら、気丈な女将に追い縋っていた。

雫は肩を落とす。己の無力に腹を立てる。

こんなはずではなかった。
こんなはずではなかったのに。

「……颯太、桜ちゃん。岬くんと一緒に部屋に戻って、宿から出る用意をして。怖がっている人や逃げようとしている人がいたら、出来るだけ手伝ってあげて」

雫がそう云うと、颯太と桜は頷いた。そして、それぞれの部屋へと足早に向かう。颯太はちらりと雫の眼を見たが、すぐに踵を返して去った。

懸命に気を落ち着かせようとする雫だったが、内心では歯噛みする思いだった。このままでは江戸の町は、妖怪どもの意のままに焼き払われてしまう。そうしてこの世の全てが、妖怪どもに奪われてしまう。何か手を打たねばならぬ。どうかして、この町を救わねばならぬ。

颯太の愛する町を。

——何でこんな事になってしまったんだろう。

——何故、こんなことに。

焦燥感に苛まれ、雫は手で顔を覆うと、無言のまま俯く。

その時、はっと気がついて、雫は血の気が引いた。

——姫様のことを、忘れていた。

考え事で頭がずつと一杯になっていて、肝心のことをすっかり見落としていた。ただでさえ部屋から動こうとしないあの人が、今は風邪を引いて伏せっているのである。放っておいたら火と煙に巻かれ、そのまま焼け死んでしまうかも知れぬ。

——せめて、あの女ひとを護らなければ。

雫は右往左往する人でこった返す廊下を抜け、姫の部屋へと急いだ。

松の間の襖を、勢いよく開ける。

「姫！」

しかし。

浄瑠璃姫は、既に床から身を起こし、雫に背を向け、窓から静かに外を眺めていた。

煌煌と炎の灯りが部屋に差して、姫の影を作っている。

流れるような黒髪だけが、妖艶に光っている。

「姫、このままではこの宿も危のう御座います。お躰に障るかとは存じませんが、どうかお逃げくださいませ」

雫は姫に向かって口早に云う。すっかりこの口調も板に付いた。

だが姫は、振り返りもしなかった。

「町が——」

ぽつり、と姫は呟いた。

「——町が、燃えておる」

暗い部屋の中は、炎と共にゆらゆら、ゆらゆらと揺れていた。

「人が叫んでおる。童が泣いておる。鬼面の武者が駆け抜けて、数えきれぬほどの妖怪どもが行き交っておる。おお、彼処の御店が今崩れた。其処の蔵が火を噴いた。まさしく地獄絵図じゃ。末世そのものじゃ。この町は——もう、お終いじゃ」

「左様に御座います。姫様どうか、どうか、お早くお逃げくださいませ！」

「酷い事じゃ。真実、酷い事じゃ——」

それでも姫は、動こうもしなかった。

齒痒くなった雫は、

「姫！」

と再び呼びかけ、背負ってでもよいから連れ出そうと決めて、部屋の中へと足を踏み入れた。そして、部屋の中央に敷かれたままの布団を横切るうとする。

すると。

その枕元に、何かが置かれていることに気がついた。

怪訝に感じ、雫は立ち止まると、それを手に取る。

それは、文のようであった。

表には、何も書かれていない。

「これは……」

雫がそれを眺めていると、姫は振り返らぬまま、応えた。

「ほれ、妖怪に襲われて、宿の外で死んでおった侍がおったじやろう。あれが持っておったものじゃ」

ああ、と雫は首肯する。見てみれば裏に血がべったりと付いている。惨

いものである。広げながら、しかし雫は首を傾げた。

「……でも何で、姫がこんな物を」

云いながらその筆書きの文字を読んでいくと、不意に、書かれた内の一
行が眼に留まった。

そして雫は——口を閉ざした。

浄瑠璃は人の心を失いし鬼姫なり

一刻も早く捕らえれば、江戸の町は最早

——鬼姫。

部屋の中には、影が揺らめいている。

揺らめいている。

影の形は、次第次第に大きく歪み、崩れ、奇怪な態に変わっていく。
ばきばきと音を立て、頭から二本の尖った影が伸び出している。

雫は、動くことが出来ない。

輝割ひびれたような禍禍ひびしき声が、こう告げた。

「何故と訊いたか。応うるまでもない——」

「——わらわが襲うたからに決まっておろうが」

